



2016年(平成28年)

1月号(No. 848)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

アピ南面から北面に転進し、初登ルート	1
初登ルートを2日間で登頂……	1
準会員制度の導入と永年会員の実費	4
相当費用の徴収に関する提案……	4
マナスル初登頂60周年記念事業のお知らせ……	6
第5回岳部・松本山岳フォーラム2015開催……	7
創立記念出版として大著3点を刊行……	8
「山の日に向けて」山を考える⑦……	9
追悼 近藤 等先生を偲ぶ……	10
活動報告……	12
山行委員会/アルパインフォトクラブ	
新入会員……	13
支部だより……	14
広島支部	
図書紹介……	15
図書受入報告……	15
会務報告……	17
会員異動……	18
ルーム日誌……	18
INFORMATION……	18
編集後記……	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……10~20時
水・金……13~20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10~18時

アピ南面から北面に転進し、初登ルートを2日間で登頂

昨年秋、アピ南西壁の初登攀を目指した登山隊だが、南西壁は状態が悪く断念、東稜上のコルから未踏の氷河を下り北面に転進。北面から最もシンプルに山頂に向かって延びる尾根から登頂したが、それは1960年の同志社大隊の初登ルートだった。

JAPANESE ALPINE EXPEDITION 2015

2011年秋、チベットにあるナムナニ(7694m)の未踏の南面から山頂に立った。北側は荒涼としたチベット平原が広がり、南西には2008年に登頂したカメット(7756m)をはじめとするインド・ヒマラヤ、南にはアピやサイパール(7040m)といった西ネパールの山々が連なっていた。願わくば、西ネパールからカイラス(6656m)への巡礼路をトレッキングしながら入蔵し、ナムナニ

ニ登山を遂行したかったが、CTMA(中国チベット登山協会)から許可を得ることができず、西ネパールのトレッキングはあきらめた経緯がある。そんなことから、西ネパールへは自然な流れで遠征が計画され、照準をアピ(7132m)の未踏の南西壁にするのにも、大した時間はかからなかった。そして、2人の若手クライマーとどんな登山ができるのか、期待を胸にネパールへと旅立った。

結局、今回の遠征は当初の予定からルート変更を余儀なくされ、

いったんは登頂を断念しかけたができる限りの冒険と山頂へのルートを模索した。その結果、未踏の氷河を下り、試登を繰り返して、初登頂時を彷彿させる探検的な登山を味わえる貴重な経験となった。

いかなるルートでも山頂へのチャンスはわずかで、今回山頂に立ったからこそ見えた多くの山々は、今後の若手クライマーたちの目標となってくれることを期待する。

(平出和也)

【隊員】

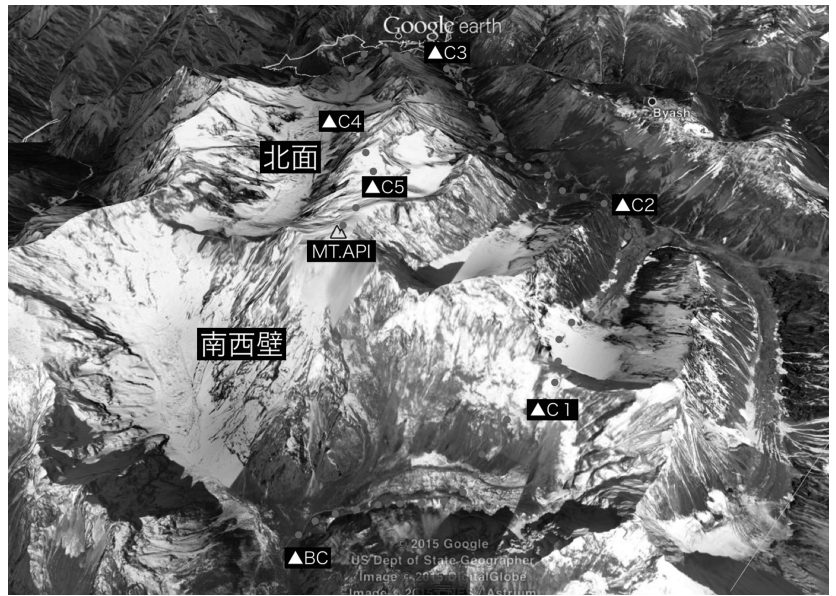
平出和也(東海大学山岳部OB)
中島健郎(関西学院大学山岳部OB)
三戸呂拓也(明治大学山岳部OB)

【遠征期間】

2015年9月27日~10月31日

【行動概要】

9月30日 カトマンズ・バスターミナル(14:05~15:45)
10月1日(晴) Ataria(9:10~10:10) ~ Gokulesh war(20:00)
10月2日(晴) Gokuleshwar(10:20) ~ Latinath(12:40)
10月3日(晴) Latinath(7:40) ~ Gansa(18:05)
10月4日(晴) Gansa(7:50) ~ Khayekot(13:40)
10月5日(晴のち曇) Khayekot(7:40) ~ Dhaulodhar(16:20)
10月6日(晴のち曇) Dhaulodhar(7:30) ~ 南側BC(9:15~14:00) ~ 4280m(15:00~16:00)
10月7日(晴) 南側BC(17:00) ~ 南側BC(6:30)



登山隊の行程図。グーグル・アースより

4300m (10:00~11:00) 南側BC (13:45) 南西壁の偵察を行なうが、予想以上に雪が少なく、危険性が高い。
 10月8日 (晴のち曇) 南側BC (8:00) 5200m (14:30)
 10月9日 (晴一時曇) 5200m (6:15) 東稜上のコル (8:15)

雪 南側BC (8:40) 5200m [C1] (15:30)
 10月17日 (快晴のち晴) 5200m [C1] (5:30) 東稜上のコル (7:10) プラトー (9:00) 氷河末端 (11:00) 半壊カルカ [C2] (14:40) 東稜上のコルから北側の氷河を下降、ナンパ・コ

5550m (10:30)
 10月10日 (晴のち曇) 5550m (5:50) 東稜上のコル (7:15) 5200m (8:30) 8:45 南側BC (12:15)
 10月11~15日 南側BCにて停滞。休養中に作戦会議。最終的に東稜上のコルから北側の氷河を下り、北面のいずれかの尾根からのアピ登頂に変更。
 10月16日 (晴のち曇のち霧一時

ーラ沿いのカルカ(放牧小屋)へ。
 10月18日 (晴のち曇) 半壊カルカ [C2] (6:50) 氷河偵察 (10:15) 14:20 Chhuagaru [C3] (14:50)
 10月19日 (晴) Chhuagaru [C3] (6:30) 4300m 北側BC [C4] (13:20) アピ・コーラ沿いの道から高度を上げ、4300mに北側BC設営。
 10月20日 (晴) 北側BC [C4] (6:30) モレーン上部 (8:45) 安全地帯 (10:30) 10:45 プラトー上 (11:05) 6000m [C5] (14:30)
 北側BCの東にあるモレーンから上部の尾根を目指す。日に日に朝が寒くなる。本日の目標高度は5500m。モレーン上の足元は歩きづらい岩場だ。雑に足を置くと崩れ、余計な消耗をする。高度は順調に上がっていき、モレーンを上がり切った所ですでに5000mを超える。ここからは三角雪田と横に延びる大きなセラックの下を行く。素早くロープを装着し、全速力で通過する。崩れたセラックを横目に進む。クレバスにも注意が必要だ。安全地帯まで進みひと息つく。90分ほどで危険地帯を

抜けた。
 昼食をとりながら作戦会議。本日はここまでと考えたが、行動を終了するにはまだ時間が早過ぎる。体力も残っている。なにより環境が良い。行ける所まで進むこととし、傾斜の弱い斜面から上部プラトーへ出る。アピの山頂は、本で行けるのではないかと錯覚するほど近く見える。広大なプラトーの先に、ひょっこりとたたずむ岩場を目印にのしり進む。ほかに目印がなく、視界が悪いと下降は非常に分かりづらい。完全に尾根上に乗る辺りに岩峰が2つ並んでおり、本日はその周辺で幕営することを決定。しかし、岩峰の手前は大きなクレバスが口を開けているため、裏側(東側)を巻く。途中、過去の登山隊が残したスノーバーが刺さっていた。
 この辺りからインドの山並みも良く見えるようになり、カイラスも確認できた。所々青氷となっているが、裏側は岩の上部まできれいに巻くことができる。もう少し下がった場所の方が風は避けられそうだが、夕景が撮影できるかも知れないという期待から上部にテントを設営する。整地を始めたこ

るから風が強くなり、外での作業が辛い。テント内に入って落ち着き、いつもどおりの作業が始まる。標高は6000mに達していたが、大きく高度障害が出ている者はいない。

10月21日(晴) 6000m【C5】
(6:30)～アビ山頂(10:30～11:00)～6000m(12:00～12:15)～4300m北側BC【C4】(16:00)

天候は回復しているが、風はむしろ強くなっていた。翌日の風が弱い予報が出ていることもあり、出発を若干躊躇する。しかし、これまでの予報も確実ではなく、むしろ天候まで悪化しては登頂のチャンスがなくなってしまう。意を決して出発する。風は15m/sほどだろうか。鼻の感覚があつという間になくなり、厚手の手袋の上からでもアックスを持つのが辛い。少々の凹凸があるが、基本的には広い尾根であり、直登でほとんど高度を稼ぐ。途中、クレパスを越えたり、急峻な青氷にアイゼンの前爪を立てて登ったりする箇所があるが、すべてコンティニューアスで通過する。日が出て風が治まることを期待したが、一向に弱ま

らない。そして、山のスケールが大きいためか、歩いても景色がなかなか変わらず、山頂が近づいてこない。轟音の中、ひたすら歩を進める時間が続いた。

しかし、中盤以降は緊張を強いられる箇所は少なく、傾斜も緩む。常にアックスを突く必要もなく、手を脇に挟んで寒さに耐える。少しづつ、しかし確実にのつべりした山頂が近づいてくる。最後の急斜面にピックを突き刺す。周りを見ると、自分たちより上に存在するものはその先のピークのみになっていた。高くなった太陽と重なって登っていた先頭の中島の右手が上がり、そこが山頂であった。



未踏の水河を下り終えて振り返り見た東稜上のコル方面

山頂に上がると、なだらかな北側とは対照的に、南側はすっぱりと切れ落ちていた。当初苦労したルートを見下ろす。ここから見るナンパ(6755m)のなんと低いことか。足元に視線を戻すと、アビの山頂は広くなく、それでいて周りを従えるような貫禄のある、ヒマラヤらしい山頂であった。北側BCからは2日でここまで上がってきたが、振り返れば多くの試行錯誤の末にたどり着いた答えがこの登頂であった。

下り始めると風は落ち着き始め、体はポカポカと暖まっていた。セラックの危険が少ないことを確認し、本日中にBCを目指すこと



北面から見上げたアビ。雪煙を上げているのが山頂

になる。アタック・キャンプを撤収し、直下岩峰裏の安全地帯まで一気に下る。プラトールから往路で休憩した安全地帯に下りる場所が少々分かりにくかったものの、良いペースでその後の危険箇所を通過、アイゼンやロープから開放される。どつと疲れが出てしまい、その後はモレインをヨロヨロしながらゆつくり下りる。それでも日が沈むまでにBCに到着。長い一日が終わる。山頂の雪煙は、夜まで消えずに棚引いていた。

10月22日(晴) 4300m北側BC【C4】(8:30)～Dopake(16:30)
10月23日(快晴のち晴) Dopake(7:45)～Dumlin(15:50)
10月24日(曇のち晴) Dumlin(7:45)～Sunsera(15:40)
10月25日(快晴のち晴) Sunsera(7:50)～Dachula(15:00～15:30)～Gokuleshwar(19:00)

*本登山隊は、創立百十周年記念事業として海外登山基金の助成を受けて実施されました。心より御礼申し上げます。

(三戸品拓也)

PROPOSAL

準会員制度の導入と永年会員の実費相当費用の徴収に関する提案

再生委員会担当理事(会長) 小林政志

再生委員会委員長 森 武昭

少子高齢化社会の進展などの社会的要因の影響により、日本山岳会の財政が厳しい状況にあることは、会報などを通してたびたび指摘されているのは周知のとおりである。そこで、前理事会でこの課題に取り組むためのプロジェクト・チームを立ち上げ、多くの検討を行ない、方向性が見えたところで、現理事会にバトンタッチした。昨年3月開催の評議員懇談会では、「3年以内での財務体質改善の具体案を示せ」との強い意見も出された。現理事会では、体系的な検討を進めるために、日本山岳会再生委員会を立ち上げ、制度設計・会員サービス・収益事業の3つのワーキング・グループ(WG)を立ち上げ、経費の削減を含めて鋭意検討を進めている。今回、制度設計WGからの提案が取りまとめられたので報告する。なお、提案にあたっては、支部担当者(会議、

支部長会議など数回にわたる意見交換を経て、再生委員会より理事会に報告したものである。そこで、さらに会員の皆様の理解を得るために会報で周知して、意見を求めることとした。

以下に示す提案に対してのご意見は、書面(郵送またはeメール: jac-saisei@jac.or.jp)で提出していただきたい(2月末締切)。それらの意見を踏まえた審議を経て、大きな問題点の指摘がなければ、6月の総会で定款変更および関連規程の変更(新設を含む)という形で最終提案する予定にしている。

準会員制度の導入

会員制度に関しては、110年の歴史を誇る当会の良き伝統を継承しつつ、社会状況に適切に対応できる柔軟な制度とすることを基本とした。具体的には、現在の定款に定める通常会員の制度を維持

し、できるだけ通常会員数を増やすことにより財政基盤を確たるものとすることを方針とした。そのためには、当会の活動内容を理解する人を増やし、裾野を広げる必要があるとの認識に至った。そこで、入会金・会費や手続きのハードルを低くし、一定の研修に相当する期間を経て通常会員となる、新たな制度として準会員制度を導入することとした。

この制度の内容は以下のとおりである。

- 1・名称 準会員とする(個人に限る)。
- 2・準会員資格期限 準会員は、3年以内に通常会員に移行しなければならぬ(3年以内に通常会員に移行しない場合は、原則として除籍する)。
- 3・準会員入会金 50000円、ただし、26歳未満は準会員入会金を免除する。通常会員に移行する際の入会金は1万50000円。
- 4・準会員会費 60000円、入会月により月割りあり。
- 5・準会員資格審査 紹介者会員1名。
- 6・準会員資格制限 会員総会で

の議決権はない。役員および各種委員会の委員に就任できない。

7・会報「山」 郵送する。

8・機関誌「山岳」 郵送しない(有料販売とする)。

9・特典など 原則として通常会員と同じ。

10・準会員入会承認 会員の推薦により会長が行なう。

11・規程等の整備 準会員規程(理事会決議)を設ける。

この準会員制度の導入に際して、最も時間をかけて議論したことは、多くの支部で導入している会友制度との関係である。会友制度は、支部の創意工夫で導入されたものであり、定款などで定められた制度ではないが、各支部の責任の下で運営され、今日に至っている。このような経過からして、会友制度は今後も支部の責任で運営していくことを前提として、これとは切り離して、新たに準会員制度を導入することとした。したがって、会友制度を導入している支部では、従来どおりの運営でも問題が生じないようにしている。

準会員は、総会議決権が付与されていないことと『山岳』の無料配

布が得られない点を除いては、ほぼ通常会員と同等の扱いとなっている。これに対して、支部友は、あくまでも支部内での行事参加が基本で、その枠を超えた行動には支部長または事務局長の許可を得る必要があるなど、限定的である点が大きき違いとなっている。

この制度の導入の大きな狙いは、YOUTH CLUBを中心とした若手会員の獲得に道を開くとともに、会友制度を導入していない支部での活性化に寄与することである。なお、審議過程でも多くの方から指摘があったが、今回の提案はあくまでも準会員という制度を導入しただけであり、入会してくる者が活動し、定着化していく受け皿をしっかりと作っていくこととセットであることが重要、との認識で一致している。この点については、理事会はもとより支部事業委員会などで検討し、すでに一部は動き出しているところである。

永年会員制度に関して

50年間在籍した会費を納めた会員は、永年会員の称号が与えられ、会費免除とすることが現定款で記されていることは、周知のと

おりである。この制度は今から50年前に導入され、長年の功績を称えるものとして定着してきた経緯がある。

しかし、5000人強の会員数の中で永年会員は400名近くになり、構成員の約8%となっている。したがって、財政上の大きな課題の一つとなっている。数年前からこの指摘にどう対応するか検討を進めてきたが、経験豊かな有識者で構成されている評議員懇談会でも多くの評議員から、もはや限界に達しており、会務運営上受益部分については負担していただくのはやむを得ない、との意見が出された。これを受けて、再生委員会では断腸の思いではあるが、会報「山」および機関誌「山岳」の実費相当分の費用として年6000円をお願いすることとした。

以上が今回の提案内容であるが、これは財務基盤確立の第一歩であり、今後も3つのWGでの検討を促進し、新たな提案を行なっていく予定である。



学生部ネパール東部登山隊 2015に対する寄付御礼

以下に掲げる多数の方々から、合計812万7000円もの援助金をいただきました。謹んで御礼申し上げます(敬称略)。

100万円 OMC株式会社
72万円 電気通信大学WV部OB会
70万円 明治大学山岳部炉辺会
50万円 野沢誠司、青山学院大学体育会山岳部OB会、真下博之、橋井恵治、野沢誠司、芦刈伊世子、木村 悟
30万円 宮津誠一
10万円 古野 淳、森武昭、荒井文隆、安西史朗、竹之内正勝、中山茂樹、井上由樹子
8万円 喜多啓允
7万円 沼田圭左、飯屋園剛二
5万円 落合正治、吉川正幸、坂口三郎、中谷康司、堀井昌子、直江俊式、山寺範佳、小林政志
3万円 井藤恵美子、石川和夫、齋藤惇生、小野勝昭、神長幹雄
2万円 久保田保雄、吉田昭仁、古市進、永田弘太郎
1・5万円 廣川正輝
1万円 穂苅康治、山本久子、平林克敏、小田島政行、影山英雄、歳弘逸郎、塚原賢勝、高原三平、大

寄付金及び助成金などの受入報告 平成27年11月まで

寄付者など	金額(千円)	寄付の目的、その他
公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団	54	平成27年度「親子登山教室」指導者研修会助成金
別リスト79の会員、団体及び個人	8,127	百十周年記念・学生部ネパール東部登山隊2015募金
別リスト11の理事及び会員	110	平成27年11月15日学生部主催のマラソン大会懇親会へ
百瀬寿雄 会員	12	永年会員からの寄付
姫野和記 会員	12	〃
山田和人 副会長	100	法人運営費用として

槻利行、伏見紀子、熊田宗次、田中賢治、須藤節子、織田澤美知子、日下田實、塩澤厚、阿部郁夫、山崎正数、川瀬恵一、近藤育代、高田允克、村井龍一、柳沢勝輔、末松誠、飯田年穂、高柳昌央、賛田統重、田井具世
5000円 梅本知榮子、亀島英治、田邊信行、専修大学体育会山岳部、匿名希望、小亀真知子、亀島英治、伊藤博夫、三宅一正、村越稔、坂井広志、桑原勇蔵
平成27年11月15日、学生部マラソン大会懇親会への寄付御礼
以下の方々よりご寄付をいただきました。御礼申し上げます。
小林政志、吉川正幸、山田和人、神長幹雄、野口いづみ、中山茂樹、直江俊式、落合正治、尾上昇、古野淳、東秀訓(各1万円)

MEMORIAL EVENT

マナスル初登頂60周年記念事業の

お知らせ

本年は、1956年5月9日に日本山岳会がマナスル(8163m)に初登頂した記念すべき60年に当たります。そこで、日本山岳会のマナスル初登頂を多くの方に知っていただくとともに、日本山岳会の活性化に資するため、関係団体と連携して、次のような記念事業を行なう予定です。会員各位のご参加をお待ちしております。

マナスル初登頂60周年記念式典・午餐会

ネパール山岳協会が主催、日本山岳会が協力して開催します。
時期…2016年4月30日(前日の4月29日には、日本山岳会主催で前夜祭を開催します)。

会場…ネパール・カトマンズ市内
ネパールヒマラヤ・トレッキング計画

Aコース…マナスル山群チャーター・マウンテンフライトとカカニの丘5日間

4月28日(木)～5月2日(月)
参加費用…JAC会員34万400

0円(一般35万6000円)

Bコース…迫力のマナスル西面展望トレッキング12日間

4月20日(水)～5月1日(日)
参加費用…JAC会員42万円(一般43万2000円)

Cコース…マナスル山群一周ラルキャラ(峠)越えトレッキング22日間

4月28日(木)～5月19日(木)
参加費用…JAC会員67万8000円(一般69万8000円)

Dコース…マナスル初登頂の舞台、北面のサマヘリトレッキング10日間

4月23日(土)～5月2日(月)
参加費用…JAC会員62万8000円(一般64万8000円)

Eコース…ロールワリンの山の学校再建視察・シミガオン展望の丘ハイキング7日間

3月23日(水)～3月29日(火)
参加費用…お問い合わせください。
問合せ先…A、B、Cコース…アルパインツアーサービス TEL 03-

3503-11911

問合せ先…D、Eコース…ウェック
トレック TEL 03-3437-8848

*A～Dコースの参加者には、マナスル初登頂60周年記念式典・午餐会および前夜祭にも参加していただきます。

*本トレッキング計画の説明会を左記のとおり開催します。

日時…2月8日(月)15:00～16:30

会場…東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル3階

国内行事

時期…2016年5月8日

計画…毎日新聞社が主催する「マナスル初登頂

の映画会・シンポジウム」などに日本山岳会が協力します。

その他

このほかにも、日本山岳会の主催でイベントを検討しています。

(マナスル初登頂60周年記念事業PT)

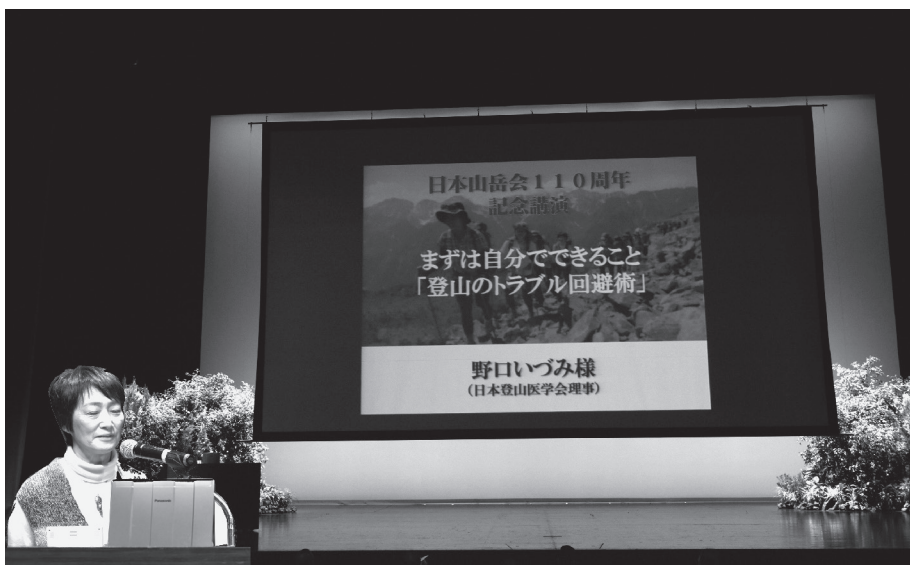


マナスル西面展望トレッキング。ハンプク付近から見たマナスル(左)とブンギ(右)などの山々

REPORT

第5回岳都・松本山岳フォーラム2015 開催——野口いづみ理事が百十周年記念講演——

医療委員会委員長 浜口欣一



「登山のトラブル回避術」について講演する野口理事

昨年11月28、29日に、松本市のまつもと市民芸術館にて「第5回岳都・松本山岳フォーラム2015」(主催…松本市、全国「山の日」協議会、日本山岳会信濃支部、信濃毎日新聞社など)が開催された。後援は林野庁、長野県、マスコミ各社など13機関、協力は山と溪谷社など13機関、出展・協賛は50社だった。

フォーラムでは講座、トークショー、パネル・ディスカッション

のほか、映画「氷壁」の上映、ヨードル、アルプホルン、フォルクローレ演奏など多彩な催し物が行なわれた。ロビーでは「氷壁を越えて」(ナイロンザイル事件と石岡繁雄の世界)として、昭和30(1955)年1月、前穂高岳・東壁で起きた同事件に関わる資料が展示されていた。参加者は2日間で延べ2400名だった。

医療委員会は日本山岳会創立百十周年記念事業の一環として参画し、2日目午前野口いづみ理事が講演「まずは自分でできること」登山のトラブル回避術」を行なった。聴衆は約400人だった。野口理事は緊急時やトラブル回避の観点から、実際に体験した同行者のいろいろなトラブルの事例を分かりやすく紹介した。内容は外傷、心疾患、医療グッズや内服薬の使い方、トレーニングなど多岐にわたる、聴衆に益すること大であった。1日目には、信州大学教育学部の井田秀行氏が講演「里山の自然を知ろう」里山のぼやき」において、多くの里山が何かしら困った状況にあり、原因の一つにアカマツ、コナラの植物循環系の崩れを挙げて説明した。山岳ガイドの小

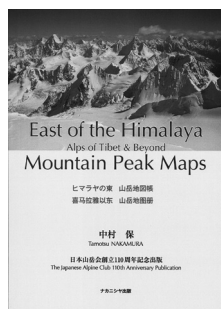
川さゆり氏は、頂上近くで御嶽山噴火に遭遇したが、状況を冷静に判断し、登山経験の蓄積で培った危機管理能力を発揮して生還した状況を語った。パネル・ディスカッション「北アルプス遭難現場から安全登山への願い」では、長野県警察山岳遭難救助隊副隊長・岡田嘉彦氏、涸沢ヒュッテ代表・山口孝氏、穂高岳山荘・宮田八郎氏が、遭難の実態と安全登山への取り組みを報告した。

2日目のパネル・ディスカッション「山の力つてなんだろう」では、山の日制定に対する思いが語られた。コーディネーターは信州山の環境研究センター長・鈴木啓助氏、パネリストは全国「山の日」協議会事務局長・磯野剛太氏、東京学芸大の小泉武栄氏、穂高岳山荘代表の今田恵氏、俳優・小野寺昭氏であった。

日本山岳会からは尾上昇、森武昭、小林政志、野口いづみの各氏と筆者のほか、信濃支部の会員も多数参加された。なお、森、野口氏と筆者はフォーラム後の交流会にも参加し、山岳関係者らと交流を深めた。

創立百十周年記念事業

創立記念出版として大著3点を刊行



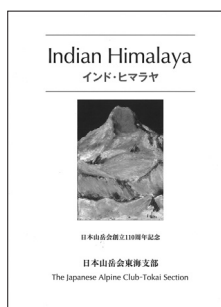
『ヒマラヤの東 山岳地図帳』

本書は、東ヒマラヤ、東チベット、四川、青海、雲南など7つの山城を網羅した画期的な地図帳で、名誉会員でもある中村保さんの労作。念青唐古拉山などの横断山脈全域を中心に、クーラ・カンリ、ガンケル・プンスムなどに加え、マクモホン・ライン上のピークの地図も含まれ、かなり広域をカバーしている。こうした地図帳はこれまで世界に例がなく、半世紀はその価値を失わないと思われる。

構成は原則として地図の見開きと写真の見開きが4ページずつセットになっており、53葉の詳細地図と530点を超える写真は見ごたえがある。また解説は、「ヒマラヤの東」の地理学的考察、「最後の辺境」といわれる探検史や入域許可の問題にも触れられ、興味深い。

解説、キャプションとも日・英・中国語で表記され、世界を視野に入れた構成からも高い評価を得られると思われる。

発行…2016年1月 定価…1万円＋税 判型…菊倍判(304mm×218mm) 上製 頁数…352ページ



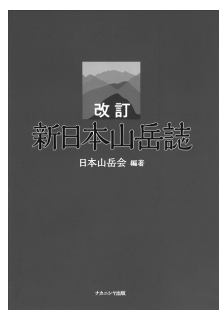
『インド・ヒマラヤ』

日本山岳会東海支部の編纂になる650ページを超える大著。東部カラコルム、カシミールからガルワール、シッキム、アッサム・アルナーチャルに至る東西約1000kmに広がるインド・ヒマラヤ全域を13の山域に大別し、そのすべてに山の概要、概念図、解説が付いた、まさに「インド・ヒマラヤの百科事典」、集大成となった。また、日本隊を中心に主要な登

山隊の記録も多数掲載されて、生きた登山史としての価値も高い。随想や探検記録も興味深く、変化に富んだ構成になっている。

巻末には、自然、社会、歴史、探検、登山との関わりを考察した解説も付き、和洋文献も網羅されている。執筆は、名城大学の沖允人さんを中心にしたインド・ヒマラヤの精通者や、日本とインドを代表するヒマラヤニスト約30名が担当、前著とともに日本山岳会創立百十周年の記念出版として、世界に誇れる労作となった。東海支部が総力を挙げて編集にあたった。

発行…2015年12月 定価…6000円＋税 判型…A5判上製 頁数…653ページ



『改訂 新日本山岳誌』

本書は、11年前に創立百周年記念出版として刊行された『新日本山岳誌』の改訂版。初版は24各支部の協力を得て、7年の歳月を懸け

て編纂された「山のエンサイクロペディア」と呼ぶにふさわしい大著である。

しかるに、この10年間に自然世界でも、社会面でも大きな変化があり、全面的な改訂が望まれていた。例えば東日本大震災や御嶽山の噴火などである。一方、2005～6年にかけて平成の大合併が実施され、国土地理院からは、山岳の標高改訂も発表された。もちろんアプローチにおける道路・交通事情の変化も激しい。これらの変化や登山ルートの確認を全32支部にお願いし、さらに編集部でも実際の地図上で再確認し、より精度を高めている。

収録山座数は、初版時と変わらず約3000座(索引の項目数)だが、解説文中で関連する山座数を加えると約4000座となる。

発行…2016年4月 定価…1万8000円＋税 判型…菊判上製、函入り 頁数…2016ページ

*これら3点は、(株)ナカニシヤ出版のご厚意により、JAC会員に限り2割引きで購入できます。購入方法は全会員にお送りするパンフレットをご覧ください。

「山の日に向けて」山を考える⑦ 山づくり、水づくり、酒づくり

前垣壽男

私は広島県の西条という所で酒造りを営んでいます。賀茂泉酒造という酒蔵で、創業から100年を超えました。この西条には、軒を連ねるように6軒の酒蔵が営業しています。灘、伏見と並ぶ「日本三大銘醸地」の一つとして、「京都西条」とも呼ばれています。

私たちの酒造りは、町の北側にある龍王山の伏流水を利用しています。標高575mの龍王山に降った雨が、50年かけて私たちの所によって来るのです。旧山陽道の下にある岩盤に守られた、およそ東西1km、南北300mというごく限られた地域に流れて来る水で、鉄分が少なく、ミネラル分を含んだ中硬水です。この水を「奇跡の水」と呼んだ学者もいました。

この龍王山の水は、酒だけでなく、西条で生活する人々も利用する大切な水です。私たちは地下水を守るため、産官学民の協働で山の整備を行ない、また、森林保全活動や調査研究活動に支援・助成を行っています。「西条・山と水

の環境機構」という組織で、2001年に設立。酒造組合内に事務所を置き、西条の酒1升に付き1円の基金を集めています。

設立の翌年、東広島市一帯で「森林と市民を結ぶ全国集い」を主催。また「第1回ひろしま『山の日』県民の集い」を龍王山からスタートしました。

その後、毎年6月第1日曜日に、県内各市町持ち回りで開催しています。毎回、各開催地合計で1万人が参加する事業となりました。国民の祝日「山の日」制定の一助になったかも知れません。

日本は北海道から沖縄まで、各地に立派な独立峰や巨大な山脈、身近には里山があり、またそこから川が流れ、湖や池があり、美しい田園風景が広がっています。新緑や紅葉、雪景色などを楽しめる四季もあります。

雨に恵まれ、山に恵まれ、そして水に恵まれた日本。各地に銘菓があるように、各地に地酒があります。「水が合わない」という言い

方があるように、地域地域で水の味が違い、おのずと地酒の味も違います。

先月、座禅をして「ありがとう」を唱え、今までに出会った人たちを瞑想する会に参加しました。不思議と山の人々ばかりが浮かんできました。針ノ木峠の小屋に掛かっていた「山を想えば人恋し、人を想えば山恋し」と書かれた木札を思い出し、燗の純米酒を飲みながら、山への想いにしばし耽っていました。山は酒の恵みだけではなく、人の恵みも育んでいます。50年に及んで流れる地下水のように湧き出ているようです。

(西条・山と水の環境機構理事長、賀茂泉酒造蔵主)

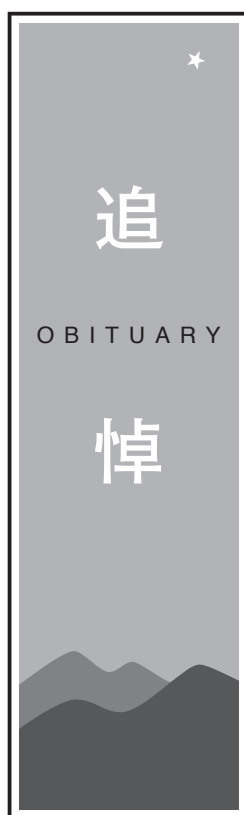


地下水を守るためには、水源の山の手入れも欠かせない

「山の日」メモ

全国「山の日」協議会が、年明け早々にも財団法人としてスタートする準備を進めている▼これまでの2年間は任意団体として、主として国民の祝日「山の日」の周知活動を展開してきたが、組織の基盤を拡大強化するため、一般財団法人としての定款案をまとめ、年内にも設立認可を申請する。11月20日開催した同協議会の臨時総会が全会一致で決めた。設立後は、なるべく早い時期に公益財団法人を目指すという▼定款案は、目的を達成するための事業として「山の日」の記念大会開催、児童、若者が山や自然に親しむための各種イベント、森や水源の確保、安全対策、地域社会の活性化を図るための事業などを掲げている▼会員(人)がベースとなつている社団法人と異なり、資金・財産をベースにする財団をどう動かすか。設立認可のハードルは高くないが、公益財団への道は容易ではなからう▼日本山岳会がどう関わっていくか。支部活動の活性化、会員増を目指す小林会長、担当・大久保副会長の積極的な取り組みを期待したい。

(成川隆顕)



近藤 等先生を偲ぶ

大森久雄

山と人とは強く結びつく場合がある。黒部と冠松次郎、尾瀬と武田久吉、奥秩父と木暮理太郎・田部重治など。その例でいえば、アルプスなら近藤等である。

1950年代から60年代、近藤先生が訳出するフランス・アルピニストの著作は、日本の登山界に革命的な変革をもたらすものであった。モリス・エルゾグ『処女峰アンナブルナ』、ガストン・レビュフ『星と嵐』、『雪と岩』、フリゾン・ロッシュ『ザイルのトップ』などに代表されるフランスの山から生まれた著作は、それまでの日本の山の世界にあつた考えや技術を雪崩のように押し流して、別種の思潮を植え付けることになった。レビュフを代表とするフランス派の颯爽とした岩壁・氷雪壁の登攀写真

が伝えるアルピニズムは、夢の世界の出来事のように魅力的だった。やぶや草付きなどのない、すつきりとした花崗岩の大岩壁、荒々しい氷河と光る氷壁を舞台にして舞い踊る彼らの姿に魅惑されて山のめりこんでいった若者は多い。

手拭いの鉢巻き、足袋にわらじ、擦り切れた古いチョッキ、汚れたひげ面……。そうした世界から仰ぎ見る彼らは、きらきらと光り輝いていた。それはいまの時代からは想像できない、カルチャー・ショックとも言えるインパクトを私たちに与えた。

山登りにファッションという感覚が流れ込んできたのも、こうした著作群から移入されたものである。日本の山登りは、近藤先生の紹介する数々の本によって、木暮理太郎・田部重治から深田久弥へと続く、輸入品ではない山登りとは別種の、地中海的・ラテン的な明

るい世界を経験することになった。ヨーロッパが生み出す新時代のこうした息吹の精力的な紹介者として、その中心にいたのが近藤先生であつた。田口二郎『東西登山史考』(岩波書店刊)はそれを「近藤等の訳業が果たした功績は大きい」と書きとめている。

＊

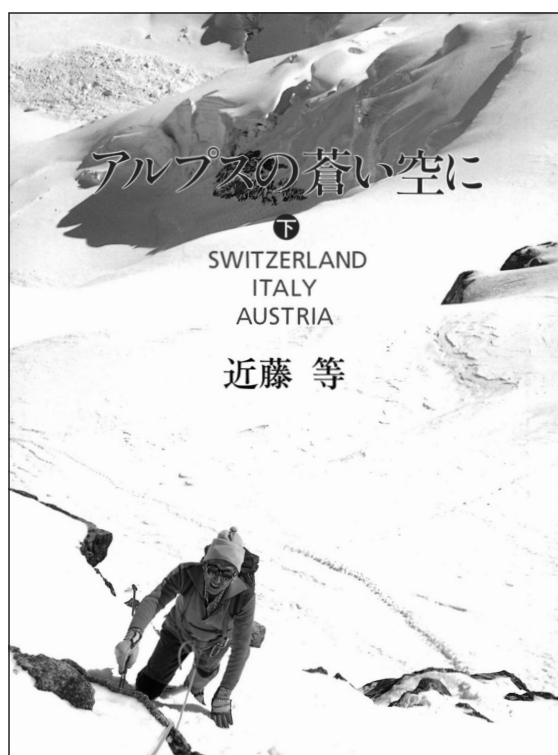
近藤先生は私が学んだ早稲田大学文学部仏文専修の大先輩だが、はじめてお目にかかったのは大学4年のときだった。読んでいたフランスの山の本でわからない言葉があり、商学部の研究室に訪ねて行つた。それ以来の60年に及ぶお付き合いだが、卒業後、出版編集という職種の関係から仕事のうえでも助けていただいた。また、この本は君がやりたまえ、と翻訳の世界にも誘つてくださった。家族ぐるみのお付き合いだったが、さばけた性格だし合理的な考えの持ち主だったから、余計な神経を使うことはなかった。衣服など生活全般も垢ぬけていて、ひと言でいえばかつこよかった。そういう方だから、山岳部出身で監督や部長を引き受けながらも、古い殻を脱ぎきれない大学山岳部とは氣質

的に合わない面があつたようだ。

＊

1960年代以降、先生はアルプスを縦横に登りまくっていた。そこから生まれた著作『アルプスの名峰』(山と溪谷社刊)は、日本人の手になるアルプス紹介の本としては最高のものであり、世界に出しても通用する内容を持っている。また、その登攀活動の記録やアルプス登攀史、自身の成長と交友は『アルプスの蒼い空に』上下(茗溪堂刊)にくわしいが、それを読めばわかるように、フランスのアルピニスト、それも人間的にも社会的にも一流の人たちと親交を結び、その社会に完全に溶け込んでいた。これらの著作は、『アルプス 山と人と文学』『アルプスを描いた画家たち』などと共に、山(特にアルプス)に興味を持つのなら眼を通しておくべき基本図書である。

日本人とアルプスとの付き合いは、高島北海、吉田博、そして辻村伊助、近藤茂吉などをトップグループとして、横有恒、松方三郎、浦松佐美太郎、さらに戦前の掉尾を飾る各務良幸、高木正孝、田口二郎へと続くが、戦後の近藤先生



スイス・ヴァリス山群のアラリンホルン東北東稜を登攀する近藤等名誉会員（自著『アルプスの蒼い空に』下巻（茗溪堂刊）のジャケットから

の場合はまさに新時代と言えて、戦前とは大きく異なるものがある。戦前の日本人の根拠地はグリーンデルヴァルトだが、戦後はそれがシャモニに変わる。そして、大岩壁や難ルートへ挑戦する若い人たちが、現地ガイドからも高く評価される登攀活動をおこなうことになる。いまシャモニに定住する日本人は多いが、Japoniard（ジャポニヤール）と呼ばれて現地の人から好感をもたれている。シャモニの住民をフランス語でChamoniard（シャモニヤール）というが、それをもじってできた言葉である。

そういう世界に開拓の道を開き、豊かに実らせたのが近藤先生であった。シャモニ当局から名誉市民の称号を受けたのも、こうした業績によるものである。さらに1972年の札幌オリンピックではフランス・チームのアタッシュエとして活動し、その功績によってフランス政府からレジオン・ドヌール勲章を授与されている。

*

横有恒のアイガー・東山稜初登攀と日高信六郎のモン・ブラン日本人初登頂とが1921年。近藤先生の生年がその年。さらに、大の

仲良しだったガストン・レビュファも同年となれば、そこには運命的な縁（きずな）を見ることができるといえる。

1985年は近藤先生にとつて最悪の年であった。ガストン・レビュファ、中野融、アンドレ・コインタミヌという山の親友3人が相次いで亡くなるのを迎えずにはならなかった。それが原因したのか、鬱（ふさ）のようになって、元気がなかった。しかし、その2年後、1987年夏、オーストリア・アルプス、ダッハシュタインに登りに行った。私はそれに同行したのだが、宮崎秀夫さんのリードで先生とロープを結んだ。先生と山へ一緒にしたのはそれが唯一の機会だった。そしてこの山を登り終えてからは、いつさいの山での行動はなくなった。全身全霊でアルプスを楽しんだ近藤先生にとつて、それは白鳥の歌となった。

*2015年11月29日歿。享年94。年譜、著作目録などは『山岳』第百十一年（2016年）号に掲載予定。また本稿で不足する面は、近藤等『アルプスの空の下で』（中公文庫・1980年）の解説を参照されたい。

平成28年度通常総会の日程および会場

例年、本会の通常総会は6月の第3土曜日に開催してまいりました。平成28年度につきましては、近年使用してきたJR四ツ谷駅前のプラザエフも含め、6月の第3土曜日に確保できる会場がないため、日程・会場ともに変更し、下記のとおり開催させていただきます。あらかじめお知らせいたしますので、ご予定にお組み入れいただければ幸いです。

日程：平成28年6月25日（土）午後

会場：TKP市ヶ谷カンファレンス・センター

（東京都新宿区市谷八幡町8番地 TKP市ヶ谷ビル）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

紅葉と温泉のバス旅 奥会津博士山と小野岳に 参加して

昨年と今年は会津に縁あつて、山とスキーと温泉とで今回は名前も知らなかった小野岳と博士山に行けて、こんなに良い山に来れたことにお礼申し上げます。帰り道では小林さんと「よかったね」と二人で連発でした。

10月17日(土) 新宿を出発。途中小雨が降り出すが、小野岳・大内登山口では曇り空。赤や黄色の落ち葉を踏みしめ、頂上か?と思いきや、まだまだ先で何度も偽山頂にだまされてやっと石の祠のある広い小野岳山頂に着き、19名の会員さん全員集合記念撮影をして下山する。帰りは太陽の日差しに紅

や黄色の葉がより一層映える。お宿は会津柳津温泉。

10月18日(日)朝食を済ませ8時に出発。博士山道海泣き尾根登山口から急坂の道が続くらしい。上に登るごとに尾根もやせ尾根となり気が抜けない状態となる。若いときは岩とかやせ尾根とか藪とか滝とか大好きだったが、今私は高齢者! バランス悪くなってるしねえ、仕方ないですね。しばらく行くと大きなアスナロが分岐に立っている。ここからは少し緩やかになった。博士山頂上に着くとすぐにお昼のお弁当を広げて食べ始めた。

博士山は人気がある山のように、いつの間にか山頂は人の山……。昼食が終わったので後から来た方々に場所を空け、下山する。帰りは近洞寺尾根へ下るが、登り道より尾根が広く安全? でもやはり

り急斜面……。大きな大きなアスナロ、大きな五葉の松、辺りは錦織りなす美しい奥会津の山々! 登山口に着くとバスが待っていて、楽しい山旅が終わった。

飲み放題食べ放題。贅沢な山旅をありがとうございました。新宿駅で解散後、小林さんと二人、無事福井に帰ってきました。

お世話してくださった方々に感謝申し上げます。

(大田慶子)

アルパインフォトクラブ 第23回写真展「心に映る山々」

2015年度の写真展は11月12(18日、例年どおり四谷のポートレートギャラリーで開催された。出展数は37点、来場者は700名ほどであった。ここ数年、デジタル作品の増えてきたことが話題であったが、このところ、その増加はやや落ち着き、45%を占める今年のフィルム作品の割合は、フィルムは未だ健在であることを示している。理由は様々だが、写真というものは対象に向かつて一枚一枚丁寧に撮るもの、という気持ち

『山岳』の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百十一年(2016年)の発刊は、本年6月下旬を予定しております。原稿の締め切りは3月末となりますが、会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させていただきます。

手書き原稿でも結構ですが、できますれば下記宛、メールでのご連絡、ご投稿をお願い申し上げます。

【送り先】〒274-0073船橋市田喜野井2-1-4 節田重節

TEL 047-476-1273 E-mail j-setsuda@ray.ocn.ne.jp

(『山岳』編集委員会委員長 節田重節)

が会員の中に生きているというところの表れと思われる。

写真展の案内ハガキとプログラムに、「日本山岳会創立110周年」および「8月11日は国民の祝日『山の日』→2016年スタート」を記載した。それらを目にした来場者からは、「日本山岳会は明治時代に誕生したんですね!」との声があったし、「生誕100年の大正池」(加藤春男会員撮影と題した作品を見ながら「日本山岳会は、大正池より古いんですね」と言われる方もおられるなど、改めて110年の歴史を感じる機会になった。

今年度のフォトクラブの一大二



業者による撤収作業

ユースは、高尾山の麓に今夏開館した「高尾599ミュージアム」から写真展の依頼が飛び込んできたことである。連絡の入ったのが9月の末。大急ぎで準備をした高尾展は、10月10〜12日の3日間で1137名もの多くの方にご覧いただけた。会場では「ワ、キレイ!」とか「こんな所に行ってみた!いい!」といった声が多く聞かれ、目の前の写真の醸し出す雰囲気への感動といったものが感じられた。

一般に「山岳写真展」というと、来場者の話題はとかく構図がどうの、色合いがどうの、はたまたレンズの性能云々ということになりがちである。そういう世界に身を置いている、いわゆる「写真が趣味」という私たちにとって、「599」で耳にした声は大変新鮮なものに感じられた。

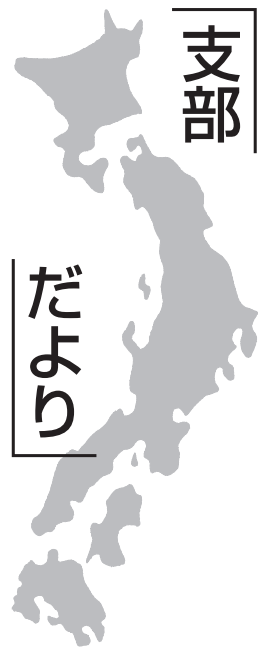
作品は左記の会場を巡回する。ご来場いただければ幸いである。

鳥取県・伯耆国山岳美術館(4〜5月) ↓ 山小屋サミット・渋谷(5月) ↓ 酒田市総合文化センター(6月) ↓ 長野市・柏与フォトサロン大門(9月) ↓ 高尾599ミュージアム(10月)

(夏原寿二)

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

広島支部

「ロングトレイル・フォーラム広島」開催さる

平成25年に「広島にロングトレイルをつくろう!」をキャッチフレーズに、広島支部の有志3人で立ち上げたロングトレイル研究会は、一昨年4月から始めて13ヶ月を費やし、広島湾岸に連なる30山45峰を踏査、整備の結果、2市5町にまたがる全長129・5kmにも及ぶ長距離自然歩道「広島湾岸トレイル」のコースを設定できた。

そのお披露目会ともいふべき

「ロングトレイル・フォーラム in 広島」を昨年11月28日に、広島市安芸区・安芸区民文化センターで開催した。日本ロングトレイル協議会と、このコースを維持・管理・運営するために6月に設立されたコース周辺の17団体が構成する広島湾岸トレイル協議会の共催で、観

光庁、国交省中国運輸局、広島県およびコース沿線の広島市を中核とした4市5町ほかの後援を得て、11月28日(土)にフォーラム(定員300人)を開催、29日(日)にトレイル体験会(6会場、定員150人)を実施した。

すべてが手探りの踏査活動と、フォーラム開催に関しては筆舌に尽くしがたいほどの労苦を伴ったが、ロングトレイル研究会(現会員37人)の汗と英知を結集した28ヶ月の活動の結果、延べ五百余人の市民が集い、予想を上回る盛況ぶりだった。

登山関係者ですら知らない単語の「ロングトレイル」を理解していただくために、また活動に協力していただくために走らせた車の走行距離は、この10ヶ月で2万km近くにもなった。この走行距離が物語るように、この新しいジャンル「歩く山旅」を普及させるには、

これからも多大な時間と費用がかかるが、国をはじめとした行政各機関も「自然を活かしたまちづくり、国づくり(地域・観光振興)」を進めており、トレイルは時代の要請とも思われる。トレイルを健康資源として、また観光資源として活用すれば、すなわち登山振興につながる、地域振興、観光振興、登山振興の三位一体型の好循環スパイラルとなると確信する。日本山岳会としても登山人口の裾野を広げるため、幅広い社会貢献のためにも、ぜひとも取り組むべき道かと思う。

私たちロングトレイル研究会がつくった広島湾岸トレイルは、今春3月に陸路250kmをオーバーし、海上路も含めると300kmをオーバーして完成する。昨年5月から広島湾を一周するための延伸計画を進めており、世界遺産の宮島を含むトレイルは、正に広島湾の多島美の絶景とともに歩く山旅となる。山を、川を、海を、島を、街を越えて広島湾岸を周回して歩く、世界でも稀なコースになるものと確信している。

各行政からの支援、協力体制も次第に整いつつある状況とともに、

11月28、29日の参加者の「期待している。応援する。この活動に参加したい」などの声を多数聴くに及んだことから、広島湾岸トレイルには、フォロワーの風が次第に強くなってきたことを肌で感じている。これからも37人の仲間と力を合わせ、広島湾岸トレイル構想実現に向かって力の限り取り組みたい。

(ロングトレイル研究会・田川宏規)

私の小谷温泉

深田志げ子著



2015年11月
山と溪谷社刊
四六判 190頁
定価 1500円+税

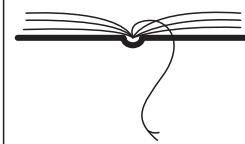
没後半世紀を過ぎても人気の衰えない深田久弥著『日本百名山』。その誕生の陰には志げ子夫人の献身的な働きがあった。最近、夫人が折々に書き残した文章が一冊に纏まった。

著書は、「Ⅰ 九山とともに」

「Ⅱ 山に逝った夫」「Ⅲ 私の小谷温泉」「Ⅳ 深田久弥の著書によせて」の4章からなっているが、見逃せないのはやはり標題作「私の小谷温泉」だろう。

一高に合格して上京した深田さんは、本郷通りを女高師付属に通う女学生に思いを寄せるが無視さ

図書紹介



れ、時を経て文学少女の北畠八穂と結ばれる。『津軽の野づら』で世に出た深田さんは、一躍鎌倉文士の仲間入りを果たす。木庭家の秀才三兄弟の長姉である志げ子さんは、大正デモクラシーの影響もあってか、専攻科を出ると職業婦人の道を歩む。弟の一郎(文藝評論家・中村光夫)の結婚式で十数年ぶりに再会した二人は、ほどなく雨飾山登山の旅に出る。雨で目的は果たせなかったが、秘境小谷温泉は思い出の宿となった。

この旅のことは深田さんも書いているから、読み比べるのも一興。深田さんの人生の「思いがけない伏兵」となった志げ子さん。鎌倉の八穂さんは病弱の身、深田さんを責めて『津軽の野づら』は自分が書いたと触れまわる。志げ子さんに子どもが生まれるが、戦争が激しくなると深田さんはそのまま中国戦線へ。空襲で焼け出された志

図書受入報告(2015年12月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
山口峯生 他 (編)	追想 秩父宮妃殿下	65p/26cm	松平恒忠(私家版)	2015	発行者寄贈
日本山岳会東海支部 (編)	インド・ヒマラヤ Indian Himalaya :日本山岳会創立110周年記念書籍	658p/21cm	ナカニシヤ出版	2015	出版社寄贈
長谷川雄助 (編)	日本山岳会北海道支部50年のあゆみ	224p/26cm	JAC北海道支部	2015	発行者寄贈
京極紘一・鈴木貞信 (編)	オホーツク分水嶺完全踏査 東へ350キロ	137p/30cm	JAC北海道支部	2015	発行者寄贈
JAC医療委員会 (編)	御嶽山噴火を考える - 体験者の声を聞く - プログラム・資料集	16p/30cm	JAC医療委員会	2015	当会発行
池田錦重追悼集編集委員会 (編)	遍歴の山々 :池田錦重 遺稿・追悼集	230p/26cm	追悼集編集委員会	2015	発行者寄贈
南極OB会編集委員会 (編)	北極読本 :歴史から自然科学、国際関係まで	195p/21cm	成山堂書店	2015	出版社寄贈
青山学院大学山岳部 (編)	90年の歴史を語る :残された資料から顧みる	48p/30cm	青山学院大山岳部	2015	発行者寄贈
同志社大学登山隊 (編)	同志社大学極西ネパール遠征2015 簡易報告書 : Aichyn峰 6055m 初登頂	26p/30cm	同志社大山岳部	2015	発行者寄贈
堤信夫	新全図解クライミングテクニック :中級クライマーになるためのTIPS	144p/21cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
甲斐崎圭	山人たちの賦 :山暮らしに人生を賭けた男たちのドラマ (ヤマケイ文庫)	271p/15cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
新ハイキング社 (編)	東京近郊 七福神めぐり :アッケラカンの笑顔が待っているコースガイド43	252p/21cm	新ハイキング社	2015	出版社寄贈
柏澄子・大武美緒子	はじめよう! 山歩きレッスンブック	176p/21cm	JTBパブリッシング	2015	著者寄贈
水野公代	群青の天空に近い村 Village in the Heavenly Sky :パキスタンと日本のお話し	60p/21cm	ハートウ・ハートウ	2015	著者寄贈
Cordes, Kelly	The Tower :A Chronicle of Climbing and Controversy on Cerro Torre	400p/24cm	Patagonia	2014	購入
Brown, Kester (ed.)	New Zealand Alpine Journal 2015	120p/24cm	New Zealand A.C.	2015	発行者寄贈

げ子さんは、実家の母と幼児を連れて湯沢に疎開。無事に復員後は深田さんの故郷大聖寺へ、続いて金沢に転居する。東京嫌いと書いてはいるが、離婚に伴う前夫人の言動から、モノ書きとしては深刻な思いもあったのでは。

上京した深田さんを迎えた日本山岳会は、文壇とは無縁だった。以後、小説よりも山岳紀行、そしてヒマラヤ研究にのめり込んでいく。丸善を通して海外から取り寄せる地図や文献は、家計を脅かしたが、夫人はよくそれに耐えた。当時、ヒマラヤを狙う若者たちは、深田さんの文献や知識を頼りにして集まり、寄れば決まって酒盛りだった。それにも笑顔で応対する夫人は、誰からも慕われる存在だった。

収録された文章は、知性と感性にあふれ、深田さんへの献身と家族への愛情に満ちている。

長男の深田森太郎氏のあとがきには胸を打たれた。両親を子ども目で見えて、なすべきことを果たして卒然と世を去った母親への敬意と愛情が伝わってくる。このあとがきを踏まえて読み進めれば、深田夫妻の全貌が理解できるであろう。

（近藤 緑）

伊藤正一著 源流の記憶——黒部の山賊と開拓時代



2015年10月
山と溪谷社刊
A4判変型 176頁
定価 2300円＋税

北アルプスの最奥に建つ三俣山荘など4軒の山小屋の主である伊藤正一氏の写真集である。写真集というと、四季折々の美しくダイナミックな山々の写真をイメージしがちだが、インパクトのある表紙のモノクローム写真を目にするだけで、ただの写真集ではないことが伝わるだろう。

氏が三俣山荘の前身である三俣蓮華小屋の権利を買い取ったのは、終戦の年1945年9月。営業を始めたのは2年後の47年である。この本の魅力は、その前後から撮りためたモノクロ写真の数々である。

たとえば、風が吹けば飛ぶような初期の三俣蓮華小屋、小屋を建て直すために上高地から槍ヶ岳を越える職人、手狭になったその小屋の横に張って客を収容したとい

う30人用テント、雲ノ平山荘建築のために100kgを超える梁を背負う歩荷の姿。ページをめくりながら、大自然の中ではすべてを人の手で行なうしかないという、当たり前前のことに改めて気づかされる。安全で快適な登山を楽しむことに慣れたヤワな私たちは、もし三俣山荘がなければ、さて雲ノ平へ行けるだろうか、裏銀座を歩けるだろうか。

ちなみに表紙の写真は「1957年 三俣へ建築資材を運ぶ歩荷たち 伊藤新道」とあるが、この伊藤新道（現在は廃道）も、三俣や雲ノ平への荷揚げのために氏が造った登山道である。それまで歩荷隊は上高地を発つと槍ヶ岳山荘に一泊しなければならず、しばしば荒天で停滞し歩荷の食糧が不足、後を追って食糧の歩荷隊が出ることもあったという苛酷さだった。

氏の著書にはほかに当時、この山城を跋涉していた誇り高き山人たちが登場する『定本 黒部の山賊』（山と溪谷社）があるが、皮の背当てに銃を背負い、カモシカや熊を仕留めるその勇姿も本書に紹介されており、彼らへの氏の深い愛情が感じられる。

また、伊藤正一氏といえば、1990年代の国立公園内における山小屋の地代をめぐる林野庁との裁判を思い出す人もいるだろう。行政の一方的なやり方に、氏が異議を申し立てたものである。すでに和解になっているが、多くの山小屋に突き付けられた問題であり、私たち登山者に直結した問題である。古い本だが『山小屋はいらないのか』（三俣山荘撤去命令を撤回させる会・編 リベルタ出版）が参考になる。

（三好まき子）



平成27年度第8回(12月度)理事会 議事録

日時 平成27年12月9日(水)19時00分～21時10分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保・山田各副会長、神長・佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・星・谷内各理事、平井・重廣各監事

【審議事項】

1・「山のお弁当」の事業化について

首都圏において「山のお弁当」を事業化するにあたり、①再生委員会内に対応ワーキンググループを組成②業者との契約書の締結③商標登録等について審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

2・助成金の応募申請について

公益法人運営委員会が行なう日

本郵便株式会社の年賀寄附金からの助成金の応募申請について審議した。(賛成15名、反対なしで承認)併せて家族登山普及委員会が行なった公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団への助成金の応募と当会への入金について報告を行なった。

3・マナスル60周年記念事業の実施について

平成28年にマナスル登頂60周年を迎えることを受けて計画されたワーキンググループをプロジェクトチームに変更し、国内およびネパールにおいて記念事業を行なうことについて審議した。また、ネパールにおける行事に関しては海外登山基金からの支出を行なうことについても審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

4・入会希望者承認について

17名の入会および1名の復活について別添資料により審議した。

(賛成15名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・会員制度の検討状況と今後の進め方(小林・吉川)

日本山岳会再生委員会(制度設計WG)を中心に進められてきた会員制度見直しの検討状況と今後の作業工程について協議した。

【報告事項】

1・北海道支部からの日本山岳会マークの使用許可申請(佐藤)

2・独立行政法人日本学生支援機構からの著作物使用申請(佐藤)

3・山口県立美術館・松本市美術館で開催の「遥かなる山発見された風景美」展への協力名義使用許可申請(佐藤)

4・ランタン谷復興支援シンポジウムへの後援(佐藤)

5・110周年記念式典・晩餐会の実施状況(佐藤)

6・110周年記念講演・シンポジウム等の開催(野口)

7・1月度理事会・常務理事会の開催日程について(佐藤)

8・全国「山の日」協議会の臨時総会が11月20日(金)に開催され、一般財団法人化が決議された。(吉川)

9・「山」と「山岳」の編集体制の見直しとコスト削減について(神長)

10・110周年記念出版物の会員への案内について(佐藤・神長)

11・電子国土賞2015の審査結果(佐藤)

12・学生部マラソン大会の実施状況(中山)

13・寄付金及び助成金の受入報告(吉川)

14・ネパール大地震救援募金の状況(佐藤)

15・第19回全国山岳博物館等連絡会議開催について(勝山)

16・晩餐会記念懇親山行について

(勝山)

17・「山」12月号の発行について
(神長)

【連絡事項】

1・内閣府からの2015年度冬の節電に関する協力依頼

2・2016生涯スポーツ・体力づくり全国会議の開催 2月5日(金)福島県

3・日本山岳協会新春懇談会 1月16日(土)アルカディア市ヶ谷

4・平成27年度第9回4支部(栃木・千葉・群馬・茨城)合同懇親山行 2月6日(土)～7日(日)大洗ホテル

【今後の予定】

1・予算・事業計画等

・平成28年1月15日(金) 平成28年度事業計画・予算提出期限

・平成28年1月29日(金) 平成27年度事業報告・会計報告提出依頼

・平成28年2月下旬 平成27年度事業報告提出期限

・平成28年3月下旬 平成27年度会計報告提出期限

会員異動(12月分)

物故

近藤 等(2337) 15・11・27

河西俊郎(6545) 15・11・19

植松満男(10042) 15・12・19

須藤卓男(14231) 15・4・1

谷口けい(15634) 15・12・22

退会
佐藤晴夫(4534) 越後

白井直器(10916) 北海道

大塚廣康(11186) 東京多摩

伊藤寛志(11942) 福井

仙坊幸治(13265) 東京多摩

松本好正(13335) 東京多摩

佐藤京子(14110) 野寄諒一(15825)

ルーム目誌
12月

1日 常務理事会 スケッチクラブ

2日 総務委員会 山行委員会
マナスル登頂60周年記念
事業WG3日 自然保護委員会 総務委員
会 YOUTH CLUB4日 総務委員会 YOUTH
CLUB

7日 総務委員会 高尾の森づくりの会 九五会

8日 山岳研究所運営委員会

9日 理事会 YOUTH CLUB

10日 財務委員会 デジタルメディア委員会 フォトビデオクラブ 山岳地理クラブ

11日 自然保護委員会

14日 ゴジュンバ氷河説明会 緑爽会 スキークラブ スケッチクラブ

15日 日本山岳会再生委員会 支部事業委員会

16日 青年部 三水会 つくも会

17日 山行委員会 科学委員会

休山会

18日 山の自然学研究会

19日 海外委員会

21日 資料映像委員会 バックカントリークラブ

22日 自然保護委員会 緑爽会
スキークラブ

24日 公益法人運営委員会 YOUTH CLUB フォトビデオクラブ 01会

25日 麗山会 山遊会
12月来室者 517名

I N F O R M

インフォメーション

A T I N

◆フォーラム——登山を楽しくする科学(Ⅷ) 科学委員会

日時 3月12日(土)13時～17時(受付12時30分)

場所 立正大学品川キャンパス11号館1151教室

演題 ①「あなたにも出来る!山の天気解析」東京スキー山岳会代表、気象予報士・

松森徹氏 ②「日本の森列伝から——北限のブナと驚異の立山杉」森林ジャーナリスト・米倉久邦氏

③「そもそも、火山ってなに——マグマ、噴火、溶岩の基礎知識」元立正大学地球環境科学部教授・福岡孝昭氏

定員 先着300名(受講票は送

付しません。定員オーバーの場合のみ連絡します。)

費用 500円(資料代)

申込 米倉久邦まで。

☒ (kagaku@jac.or.jp) ま

たはハガキ(〒102-0

075 東京都千代田区

三番町7-6-303)で

*立正大学品川キャンパスへのア

クセスは (http://www.ris.ac.jp/

access/shinagawa/index.html)を

参照。「山手通り口」をご利用下さ

◆江本嘉伸さんが語る「探検部の系譜」——山岳史懇談会

図書委員会

初めて大学に「探検部」が誕生して60年を迎えようとしている。奇

しくもマナスル登頂と同じである

あの時代に何を契機として「探検

部」が設立されたのか? その時

代背景や山岳部との関係は? 各

大学の特色は? そして、どんな

形で現在につながっているのか?

1979年、大学山岳部、探検

部出の有志たちと「地平線会議」を

創設、37年経ったいまもその活動

の中心にいるジャーナリストの江

本嘉伸さんに、山岳史の中での探検部とその周辺について語っていただきます。

日時 2月22日(月)18時30分

会場 日本山岳会104号室

問合せ 三好まき子 ☎ 090-

8019-8601

☒ 344mm@mbe.nifty.com

◆雪の焼岳に登る

山行委員会

中の湯温泉に前泊し、新中の湯

ルート登山口より焼岳に登ります。

中腹の平坦地までは樹林帯でワカ

ンまたはスノーシューでの登高で

す。以降は、天候に恵まれるなら

穂高の峰々を眺めながらの快適な

尾根歩きとなります。頂上付近は

岩混じりでピッケル、アイゼンの

世界です。(歩行約9時間)

日程 3月26日(土)〜27日(日)

集合 26日16時迄 中の湯温泉

解散 27日17時頃 中の湯温泉

費用 1万5000円程度

定員 10名

申込み 2月29日までに会員番号、

氏名、生年月日、電話番号、

住所、後泊希望の有無等を

明記し、菊池武昭宛

☒ sanko@jac.or.jp ☎ FAX 03

—39913611

*申込み者に詳細案内いたします。

◆映画と講演会

「マナスルに立つ」日下田 實氏

東京多摩支部

日本山岳会マナスル初登頂60周

年と「山の日」制定を記念して、映

画「マナスルに立つ」を上映し、マ

ナスル登頂者・日下田 實氏に当

時のエピソードなどを語っていた

できます。

日時 2016年1月30日(土)15時

30分〜17時30分

講師 日下田 實氏

会場 京王プラザホテル八王子4

階「宴」

費用 500円(会場費・資料代)

申込み 坂本正智090-183

9-8424 ☒ big-matti

@kh.biglobe.ne.jp



◆編集後記◆

●昨年12月21日の谷口けいさんの遭難には、大きなショックを受け

た。いま最も脂が乗っている女性

登山家の訃報は信じられなかった

が、「上手の手から水が漏る」とは、

まさにこのことか。過去にも多く

のアルピニストが、思わぬ所で落

命している。ヴェルコールの岩場

で墜死したりオネル・トレイ、ヴ

アレ・ブランシュでクレパスに落

ちたルイ・ラシュナル。日本でも

星野隆男や関田美智子が、通い慣

れたはずの穂高連峰であつてなく

最期を迎えている。

●どんな山でも思わぬリスクが潜

んでいるもの。常にある程度の緊

張感を持って行動し、ザイルは解

いても、心は緩めてはならないと

いうことだろう。いまさらながら

山の怖さを知った。(節田重彰)

日本山岳会会報 山 848号

2016年(平成28年)1月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社